

広瀬 雅人(ひろせ まさと)
 ■国際沿岸海洋研究センター 生物資源再生分野 特任助教
 研究分野：海産無脊椎動物の分類学、付着生物群集に関する生態学

大槌の海底の生き物を調べる

大槌の海にはどんな生き物が生息しているのでしょうか？ 実は今から三十年以上前に、大槌湾に生息する無脊椎動物のリストが発表されています。しかし、震災を経験した現在の海底にどのような生物が生息しているのか、その実態はほとんど調べられてきませんでした。私は、震災後の大槌の海底にどのような生物が生息しているのかを、様々な方法で調べています。沿岸の浅い場所ではスキューバによる潜水調査を行い、生物の種類や数を調べています。また、大槌湾内に付着板を設置し、フジツボなど天然の付着生物がどの時期・どこに付着するのかも調べています。大槌沖などの深い場所では、ドレッジと呼ばれる採泥器や、船上で映像を見ながらリモコンで操作する水中無人探査機（ROV）を使い、海底の様子や生物の多様性を調べています。

まだまだ新発見の宝庫

これまでの調査で、過去に大槌から報告されてこなかった生物も多数得られています。たとえば高級食材で知られるナマコの仲間では、少なくとも十四種の生息が新たに確認されました。大槌からは過去

大槌湾の生き物の多様性を調べ、その証を後世に遺す

に三種しか報告がなかったコケムシ動物については、新たに五十種以上が得られています。これらの中には名前が付いていない種も含まれています。また、深い海底の生物が津波で受けた影響についても明らかとなりました。蓬莱島の海底では、サガミユビヤコケムシが震災をまたいで三十年ぶりに発見されました。大槌湾口部の水深七十mには、震災前からそこに生息していたと考えられるオオハネガイという二枚貝や、サンゴに似た形をした大型のコケムシが得られています。このことから、深い海底では浅い場所に比べて津波によるかく乱が小さかった可能性が考えられます。

大槌沖の海底では、ムツサンゴやヤギといったサンゴの仲間が群生した生物群集も見つかりました。海藻などが生育できない深い海底で、多くの動物たちに生息場として利用されていると考えられます。これらの生物群集が大槌の生物多様性に果たす生態学的な役割についても明らかにしていきたいと考えています。

今の多様性の証を将来に遺す

今後は、まずこれまで大槌湾で得られた生物の写真を集めた図鑑を作成し、多くの人にその多様性を知ってもらう機会へ繋げていきたいと考えています。

す。また、調査で得られた生物標本は、将来の研究者がいつでも当時の生物について調べることができるよう、沿岸センターで適切に保管していく予定です。この先復興が進むと、大槌湾に生息する生物の数や種類も変化するかもしれません。そんなとき、過去の調査で得られた生物標本は、大槌湾の生物がどのように変わってきたのかを示す、いわば、タイムカプセルです。そんな「標本」という名のタイムカプセルを未来に遺しながら、大槌湾にどのような生物が生息し、それらが互いにどのような関係を築き、その関係が時間とともにどう変化していくのかを明らかにしていければと考えています。

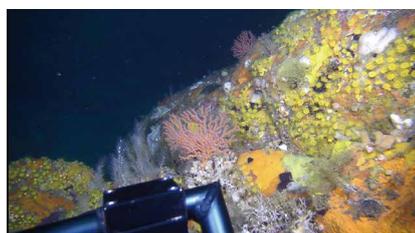
サガミユビヤコケムシ

「ひょうこりひょうたん島」のモデルにもなった蓬莱島の水深25mの海底には、美しい生物が30年前と変わらず生息しています。



ムツサンゴとヤギの群集

(大槌沖の海底：ROVで撮影) 大槌の海底は、鮮やかな付着生物たちで彩られていました。



標本の作成

採集した生物は、採集日や採集場所、採集者などの情報を付けられることで、標本となります。標本となった生物は、採集された当時の姿を数十年・数百年後まで伝えることとなります。